『詩古微』の版本の異同に関する考察

浅井邦昭

はじめに

道光・咸豊年間は、中国の社会が大きく変化した時期である。清朝による統治にもしだいにかげりが見え、そのため社会における矛盾は激しくなり、また一方では西洋列強の脅威が感じられるようになった。このような内憂外患の時代において、魏源は当時の経世・学術の方面で大きな影響を与えた人物の一人である。学術の分野において彼は今文経学を主張し、当時の学術界に大きな役割を果たした。清朝学術において、魏源は荘存与・劉逢禄らの常州学派の思想を継承発展させた人物として位置づけられる。彼の『詩古微』・『書古微』は清朝今文経学の代表作とされ、後に康有為らの変法運動に影響を与えたことで知られる。梁啓超によれば、魏源の経学の精神は当時の正統派の経学研究者とは異なる点があり、その特徴として経世に関する議論を好んだとする。さらに後の今文経学者が経学を用いて政治論議を行ったのは、魏源の影響によるものと見なしている（注一）。このように魏源は清朝後期において学術界に大きな役割を果たした人物と言える。

しかしながら魏源に対する現在までの研究は、まだ十分とは言えない。彼を西洋の文明を紹介した人物として、また康有為らに影響を与えた人物としては既に論及されている。しかし魏源の経学についての考察はまだ十分ではないように思われる。そこで本稿では魏源の代表的な著作の一つである『詩古微』の版本における内容の異同に注目して、彼の経学の特徴がどのように形成されたかを論じてみたい。

一『詩古微』の版本

魏源の『詩古微』は清朝今文経学の流れのうえでも重要な著作であるが、魏源自身が関わったテキストとしては道光九年（一八二九）頃の『詩古微』初刻と道光二十年（一八四〇）の『詩古微』二刻の二つの版本がある。また現存の『詩古微』の版本については高橋良政氏の論文に詳しいが、それによると次の三系統の版本があるとされる（注二）。

一、初刻二巻本（修吉堂刻）
二、増補修訂本（道光二十年序刻）
三、削除改編本（『皇清経解続編』所収十七巻本）

この二の増補修訂本は、楊守敬の重刻序に言う「二刻」本にあたる。本稿ではそれに従って、増補修訂本を二刻本と呼ぶことにする。また三の削除改編本は二刻本を改編し『皇清経解続編』に収めたものである。その内容の移行については、高橋氏の論文に既に触れられているのでここでは触れない。しかし初刻二巻から二刻二十巻にいたる内容の変更は単なる増補に止まらない。そこには魏源の視点の変化がうかがえる。そこで以下初刻本と二刻本の内容の異同に注目し、そこに彼の師承の影響を踏まえつつ、魏源の経学の特徴を論じる。なおテキストについては初刻本と二刻本を合編した岳麓書社出版の魏源全集『詩古微』を採用した。

二『詩古微』著作の目的

まず『詩古微』著作の目的について見てみると、魏源は常に毛詩と三家詩の関係について注目していたようである。彼は『詩古微』二刻「目録書後」において、彼が意識した先行する著作として朱子の『詩序辯』・王応麟『三家詩考補』・何楷『詩経世本古誼』・范家相『三家詩拾遺』・徐璈『詩経広詁』などの名をあげている。彼はこれらの書が三家詩の逸文を捜集した功績は評価しつつも、その欠点について次のように述べて、『詩古微』の著作動機を引き出している。

顧其書案而不斷、於三家大義微言、待引申者、概未之及焉。天牖顓蒙、俾昌絶學、冥探顯闢、奥阼洞開、閱二十餘年、捜討成編、多從古所未有。

（それらの著作について見てみると、勘案するが断定はしていない。また三家詩の微言大義については、意義を敷衍させるのが必要なものには概ねこれに言及していない。天は愚昧な者を導いて、絶えたる学問を盛んにし、暗い所において探し、

明るい所を開いて、学問の奥義は貫き開かれた。私は二十数年間書物を読み、捜集検討して著作を著した。その内容は昔よりかつてなかった学説が多い。）

ここに見られるように、魏源が『詩古微』を著す動機としては、宋以来の三家詩研究の業績に基づきさらにその研究を盛んにしようとするものである。一般に『詩古微』は劉逢禄の影響を受けた今文経学の著作とされる。しかしここでは当初『詩古微』著作の動機として劉逢禄の今文経学への志向を強調していない。したがって『詩古微』初刻と二刻の内容の違いは、魏源自身の思想においても清代学術の変遷においても重要な意味を持つ。そこで以下『詩古微』初刻と二刻の特徴について具体的に見てみる。

三『詩古微』初刻について

まず『詩古微』初刻については、道光九年（一八二九）頃の著作とされる。その根拠として、道光九年に没している劉逢禄が『詩古微』に序を書いていることがあげられる。その初刻本の構成は「巻之上」・「巻之下」に分けられる。「巻之上」では、魏源はまず「正始篇」・「詩楽篇」において四始や国風の次序、小雅の世次について論じている。ここは『詩』の総論というべき部分で、彼は『詩』の効用を引き出す作業を行っている。彼は多方面より分析し、『詩』の復元を行おうとしたのである。引き続き「巻之上」においては「三家発凡」・「毛詩明義」で三家詩と毛詩についての議論がなされる。それを受けて「巻之下」では三家詩の各論が展開される。「三家発微」以下では三家詩の各家の特徴を論じ、「三家通義」以下では三家詩と毛詩の異同を具体的例証をあげて論じている。このように『詩古微』初刻は大きく二つの部分に分かれている。前半では『詩』について彼なりの復元を試み、後半では『詩』の解釈における三家詩と毛詩の比較を行っているのである。

では魏源は『詩古微』においてどのように三家詩と毛詩を捉えていたのか。二刻本「詩古微序」では、魏源は自身の『詩』に対する態度の変遷を次のように述べる。

余初治『詩』、于齊魯韓毛之説、初無所賓主。顧入之既久、礙于此者通于彼、勢不得不趨于三家。始于礙者卒于通、三家實則一家。（私は初め『詩』を学んだ頃は、斉魯韓毛の学説においてはどれを

主とするということはなく、また客とすることはなかった。研究すること既に久しく、こちらで解けなかったことは、あちらで解くことができた。そのなりゆきとしてはどうしても三家詩に傾倒することとなったのである。また初めは解けなかったことも、終に解くことができた。その意味では三家詩は実は一家であったのである。）

魏源の言葉によれば、彼は『詩』の研究当初は三家詩と毛詩の間に優劣をつけていない。事実初刻本はこのような態度に基づいて書かれている。初刻本の立場として、現在毛詩が唯一のテキストとして残っている以上、その価値について否定しない。しかしその際にはテキストの原形に戻す作業が必要であるとする。彼はまず毛詩を原形に戻した上で、三家詩と毛詩を比較しようとした。その比較により『詩』の本質を明らかにしようとしたのである。比較の結果、彼は次のような結論に到達する。

『詩古微』初刻「三家通義」

於是而毛與三家會通之故可得而言也。夫三家之於毛、猶『左氏』・『公羊』之於『穀梁』、或毛所未備而三家補之、或小異而大同、或各義不妨兩存、在善讀者之引申而已。（ここより毛詩と三家詩が会合変通することの理由は、説明することができる。そもそも三家詩の毛詩との関係は、左氏・公羊の穀梁との関係のようなものである。ある時には毛詩にはその解釈がなく三家詩の解釈によって補い、またある時には大同小異であり、ある時にはそれぞれの意義を併存してもかまわない。練達の読者が敷衍することにあるということだけである。）

ここでは三家詩と毛詩はたがいに補い合う関係であるとしている。魏源は初刻本当時では三家詩と毛詩の価値をともに重視していたため、范家相の『三家拾遺』のような三家詩の価値の誇張や、姜炳章の『詩序補義』のような三家詩の徹底的な否定にたいしては非難をする。彼の初刻本当時の三家詩と毛詩に対する態度は、どちらかをとるというのではなく「会通」させて『詩』の本質に迫ろうとしたのである。

また三家詩と毛詩のどちらの価値も認めるという立場は、初刻本における解釈の態度を寛容なものとした。彼は前述したように三家詩と毛詩の解釈において両義の併存を認め、解釈の小さな違いについては師説の違いと見なしている。その例として魏源は「三家通義」において「騶虞」の解釈の違いをあげている。彼は毛

詩が「騶虞」を仁獣とし、魯詩が官職とするのを、魯詩の解釈が比較的古いとしつつもどちらか一つを採用することをせずに両義を併存すべきとする。このように魏源は三家詩と毛詩の解釈の違いに対し、『詩』の効用に妨げとならない限り両義の併存を説き、その違いを重視しなかった。また彼は「三家同義」においては四家が同義とする解釈を五十二条あげ、三家詩と毛詩が対立しないことを強調しようとした。このように魏源は三家詩と毛詩の共通点を探ることにより、両者を一つの枠で捉えようとした。つまり初刻本当時における毛詩と三家詩の関係としては、相互に補い合う対立しない関係として捉えられたのである。

また初刻本の特徴として、朱子に対する評価があげられる。魏源は初刻本においてわざわざ章を立てて「集伝初義」として朱子に対する評価を加えている。朱子の『詩集伝』についてその「集伝初義」では次のように述べる。

馬端臨曰「『詩』雅頌之序可廃、而國風之序不可廃。」予則請補一語曰「『詩』國風之『集傳』可廃、而雅頌之『集傳』不可廃。」（馬端臨は「『詩』の雅・頌の毛序は廃止すべきであるが、国風の毛序は廃止すべきではない。」と言っている。私は一言言い補いたいのは「『詩』の国風の『詩集伝』は廃止すべきであるが、雅頌の『詩集伝』は廃止すべきではない。」ということなのである。）

魏源はこのように『詩集伝』に対する評価を下している。また彼は朱子の『詩』に対する解釈を初説と『詩集伝』に分類した。そしてその初説は『詩集伝』と解釈が異なり、毛序と反しない解釈が多いと主張した。その上で魏源は具体的な例証をあげて、朱子の解釈のうち『詩集伝』と初説の優れた方を採用すべきであるとしたのである。彼がわざわざ朱子に対してそのような評価をしたのはなぜだろうか。『詩古微』初刻で魏源は『詩』の解釈において三家詩と毛詩の解釈を「会通」させることを求めた。彼はそれに止まらずさらに朱子の解釈をも自分の『詩』の解釈の体系の中に組み入れようとしたのである。魏源は道光初年に『四書』に関する著作を著した。その際に朱子の道統の説を評価し、さらにその説を補充しようとした。つまり当時彼にとって朱子は決して排除すべき対象ではなかった。このような魏源の当時の考え方と同じ流れのうえで『詩古微』初刻における朱子の評価はなされたと考えられるのである。

以上『詩古微』初刻における先行する『詩』の解釈に対する魏源の態度について見てみた。一言で言うならば、それは『詩』の解釈について、毛詩と三家詩それに朱子の学説を総合しようとするものである。ではこのような態度が二刻本ではどのように変化したのであろうか。

四『詩古微』二刻について

二刻本は初刻本よりほぼ十年を経て成書したものであり、そこでは単なる増補に止まらず、大きく構成を変え内容も変化している。まず構成では『詩古微』二刻は大きく四つの部分に分かれる。四つの部分とは「巻首」・「上編」・「中編」・「下編」である。まず彼は「巻首」において三家詩と毛詩の伝授考を置き、それぞれの伝授の淵源を明らかにしている。次に「上編」では三家詩と毛詩の異同を論じ、さらに初刻本の「巻之上」にあたる「夫子正楽論」・「毛詩義例篇」・「四始義例篇」を続ける。またその後には新たに国風・二雅・三頌についての義例を論じる。引き続き「中編」では、国風・二雅・三頌の各詩についての解釈を論じ、最後の「下編」では、三家詩と毛詩の詩序を集めた「詩序集義」と前人の議論を収録した「詩外伝演」を収めている。

この構成よりわかることは、二刻本では三家詩に関する議論が増えていることである。初刻本においては四始・詩楽などの議論が「巻之上」で、三家詩と毛詩との異同が「巻之下」で論じられた。しかし二刻本では初刻本の「巻之上」にあたる部分はほとんど増補されず、三家詩と毛詩の異同に関する部分が大幅に増えている。つまり構成から見るならば二刻本では三家詩と毛詩の異同こそが魏源の関心事であったと推測できる。

それでは『詩古微』二刻の目的とは何か。初刻本では特にその目的については述べられていないが、二刻「詩古微序」では次のように目的を述べる。

『詩古微』何以名。曰「所以發揮齊魯韓三家詩之微言大誼、補苴其罅漏、張皇其幽渺、以豁除毛詩美刺・正變之滯例、而揭周公・孔子制禮正樂之用心于來世也。」（『詩古微』はどうして名付けられたか。答えるには「斉魯韓の三家詩の微言大義を発揚し、その欠けた部分を補い、奥深く微妙な理を顕揚する理由は、それにより毛詩の美刺・正変という通じることのできない義例を取り除き、

そして周公・孔子の礼を定めて楽を正したという後世に対する心遣いを明らかにすることなのである。」）

ここから『詩古微』二刻独自の目的を見て取ることができる。魏源は三家詩の発揚を二刻本の目的としており、初刻本の三家詩と毛詩の「会通」によって『詩』の復元をしようとする目的とは異なっている。つまり『詩古微』二刻において魏源の態度は三家詩を重視する方向へ移行したのである。

では三家詩について彼はどのように考えていたのだろうか。前述した二刻「詩古微序」に見られるように、彼は最終的には三家詩を重視するようになっていった。三家詩の解釈をより充実するために、魏源は「三家實則一家」という重要な義例を提唱した。この義例は後に皮錫瑞には非難をされているが、魏源が三家詩を顕揚するにあたっては重要な義例であった（注三）。清代において三家詩は既に断片的にしか残っておらず、毛詩に対抗できるテキストとは言えなかった。そこで魏源は三家詩の解釈を総合することにより、毛詩と対抗できるテキストを復元しようとしたのである。ここからも彼が三家詩と毛詩を「会通」させることを求めた初刻本の立場より、三家詩と毛詩を対立的に捉えようとする二刻本への立場の移行を見ることができる。魏源にとって、二刻本では三家詩の意味はさらに重要になったのである。

魏源は三家詩を重視するにつれて、毛詩に対しては多くの批判をするようになった。彼の毛詩への否定的な態度はまず毛詩の伝授への懐疑となって現れた。魏源は「毛詩伝授考」で、毛詩の師説の伝授が主張する人によりその説が異なることを非難した。彼は毛詩の師説の伝授を否定することで、初刻本では認めた毛詩の微言大義に懐疑的な態度をとる。魏源は毛詩を批判することで、三家詩の解釈の正当性を強調しようとしたのである。このように二刻本での三家詩と毛詩との関係は初刻本での関係とは大きく変化した。そのため具体的な解釈においても初刻本とは異なるものが多く出て来た。そこで以下具体的な例をあげて初刻本と二刻本の違いについて見てみたい。

まず「四始」については、初刻本では「正始篇」で、二刻本では「四始義例篇」で論じている。魏源は初刻本において三家詩と毛詩の解釈を総合することで「四始」の正当性を評価しようとした。彼は「四始」の説は即ち毛詩の「正始」の説であるとして、毛詩の「正変」「正始」の義例は三家詩の主張する「四始」と同

じものであるとした。一方二刻本において魏源は両者を別のものとして捉えようとしている。彼の解釈によれば、毛詩の唱える「四始」は即ち「正始」であり、また「正詩」である。しかし魏源は毛詩の義例では文王・周公がすべての「正詩」に関わっていないと考えた。さらに実際には毛詩の「正詩」は「四正」と言うべきで「四始」とは言えないと主張した。その結果として彼は三家詩が「四始」を文王・周公によって分類したのとは異なるとした。つまり魏源は二刻の毛詩の「正始」については、初刻本では認めた毛詩の微言大義を否定的に捉えているのである。彼は「正始」と三家詩の「四始」は別のものであるとし、その評価として毛詩は三家詩に劣ると見なした。このように魏源は初刻本では同じ義例と考えた三家詩・毛詩の「四始」を、二刻本では三家詩と毛詩の「四始」はそれぞれ別のものと考えた。つまりここで見られるように彼は三家詩と毛詩の違いに寛容な立場より、厳しく峻別する立場へと移行したと言えるのである。

また初刻本であげた両義を併存する解釈についても、二刻本では魏源は一つの解釈のみを採用した。例えば初刻本では官職と仁獣の二つ解釈の併存を認めた「騶虞」について、彼は二刻本では次のように言う。

『詩古微』二刻「召南答問」

毛傳特欲配「麟趾」之仁獸、故創訓「義獸」、望文立説。不知「麟趾」則子孫之多賢、「騶虞」言在官之多賢、故皆爲「關雎」・「鵲巢」之應。

（毛伝はわざわざ「周南」の「麟趾」の仁獣に合わせようとして、だから新たに「義獣」と訓じて望文生義により説を立てた。「麟趾」は子孫に賢人が多く、「騶虞」は官職にある者が賢人が多いことを述べ、だからともに「関雎」・「鵲巣」の応となっていることを毛伝は知らないのである。）

このように魏源は初刻本では併存を認めた解釈を、二刻本では毛詩の解釈を望文生義と退ける。二刻本では毛詩と三家詩に優劣をはっきりさせようとした。そのため初刻本の「三家通義」で両義を併存すべきとした解釈を二刻本では一つの解釈に統一した。ここからも魏源が二刻本において『詩』を解釈する立場が大きく変化したことがわかるのである。

また『詩古微』では初刻本と二刻本で評価が逆になった例も存在する。その例は「生民」の「聖人皆無父」に対する解釈である。三家詩はその説に同調するが、毛詩は「求子得子」としてその説を否定している。この解釈の違いについて魏源は初刻本において次のよう

に述べる。

『詩古微』初刻「三家異義」

「生民」之「履敏載歆」、則本三家詩。然皆遜毛義之從順。（「生民」鄭箋の「親指を踏んで心は喜んだ」というのは、三家詩の解釈に基づくものである。しかしそれらは皆毛詩の解釈の素直なのには及ばない。）

初刻本において、魏源は聖人とても人の子という常識より判断し、毛詩の解釈の方が優れるとし、三家詩の解釈についてはその解釈を退ける。しかし二刻本においてはその評価は全く反対となる。魏源は『爾雅』・『詩』の雅頌・『公羊伝』などの記載を根拠として、聖人が天に感応して生まれることを承認した。そして毛詩の解釈については次のような批判を加える。

『詩古微』二刻「大雅答問上」

周魯特立姜嫄之廟、孟仲子謂閟宮爲禖宮。若非誕生有殊、何爲特祀皇妣。此諸古義、固勝毛詩望文爲説矣。（周と魯はわざわざ姜嫄の廟を建て、孟仲子は姜嫄の廟である閟宮を子宝の神の廟として考えている。もしその誕生が異常でなかったら、どうしてわざわざ后稷の母である姜嫄を祭るのか。これらの古くからの解釈は、当然毛詩の望文生義の解釈に勝るのである。）

魏源のこのような評価の変化は、三家詩の解釈を正しいものとして顕揚しようとする二刻本における彼の志向に基づくと考えられる。初刻本において魏源は三家詩・毛詩をともに孔子の微言大義を伝えるものと考え、具体的解釈については是々非々の態度で臨んだ。そのため毛詩が三家詩より勝るということがありえた。しかし二刻本において彼は三家詩こそが微言大義を伝えているという態度をとった。その結果として初刻本と二刻本の評価が逆になるという現象が起こったのである。しかしこの態度は毛詩を偽書として退けるものではない。後に著された『書古微』「例言上」でも触れられているように、魏源は最後まで毛詩と三家詩の併存を認めている。彼はこれまで述べたように毛詩を批判している点もあるが、また一方ではその解釈を採用して三家詩の助けとしている。その点で『詩古微』には、今文以外を完全に否定した『書古微』ほどの徹底した態度は見られないのである。

このような三家詩の発揚は魏源の今文経学への傾倒を示す一つの現象と考えられるが、その他に今文経学への傾倒を示す例として『公羊伝』の三科九旨によって『詩』を解釈しようとしたことがあげられる。例え

ば三科の一つ通三統説について魏源は次のように述べる。

『詩古微』二刻「商頌魯韓発微」

孔子自衛反魯、正禮樂、脩『春秋』、據魯新周故殷、運之三代。〔見「孔子世家」〕是以列魯于頌、示東周可爲之志焉。次商于魯、示黜杞存宋之微權焉。合魯商于周、見三統循環之義焉。（〔〕は自注を示す。）（孔子は衛より魯へ帰り、礼楽を正し『春秋』を修訂した。魯に基づき、周を近い王朝とし、殷を遠い王朝とし、三代の法を運用した。（『史記』「孔子世家」に見える）このことによって魯の詩を頌に列ね、魯が東の周として周の道を行わなければならないという意を示したのである。また商頌を魯頌の次に置き、杞国を退け、宋国を保存するという隠された権限を明らかにしたのである。また魯頌・商頌を周頌と一緒にすることで、三統循環の義例を示したのである。）

これは初刻本においては全く見られなかった新しい特徴である。彼は『公羊伝』の理論を『詩』の解釈をする際の指導理論とした。『公羊伝』の三科九旨を他の経書の指導理論にまで押し広めたのは後で述べるように劉逢禄からの影響があったと考えられる。後の康有為らへの今文経学の流れを考えるうえで二刻本にこの特徴が現れたのは重要である。三科九旨の導入により『詩古微』二刻は初刻本とは大きく違う性格を持った。彼は今文の『公羊伝』の解釈を利用して『詩古微』を解釈した。それは魏源が今文経学の書として『詩古微』を位置づけたことを示しているのである。

また二刻本では新たに王夫之の解釈を導入した。初刻本においては魏源は王夫之の名をあげていない。そこから初刻本成書以後『詩広伝』を読む機会を得たと考えられる。二刻本では「下編」の「詩外伝演下」すべてを『詩広伝』よりの引用に当てるほかに、「中編」の答問においても王夫之の引用を多く引いている。このほか『詩古微』二刻においては多くの学者の学説が引用されている。夏伝才氏によれば、魏源は三家詩以外の前人の議論を引用して自身の思想の補充を行ったが、それは『詩古微』の政治的傾向を示すものである（注四）。魏源は初刻本では毛詩・三家詩のほかに朱子の解釈を採用していた。しかし二刻本には朱子の解釈は影を潜め、王夫之をはじめとする解釈が大幅に採用された。そこにはまた十年の歳月をかけた二刻本での魏源の『詩』への研究の成果を見ることができるのである。

五『詩古微』における師承の影響

以上見てきた『詩古微』の版本の内容の異同は魏源の学問の受容と関わるものである。そこで『詩古微』の師承との関わりについて見てみたい。魏源の息子魏耆の『邵陽魏府君事略』では、魏源は漢学を胡承珙に、宋学を姚学塽に、公羊学を劉逢禄に学んだとする。ここでは『詩古微』と直接の関係の見られない姚学塽を除き、胡承珙と劉逢禄について『詩古微』との関係を論じる。

まず胡承珙についてだが、『魏源師友記』では『詩古微』著作の動機の一つとして『毛詩後箋』を著した胡承珙の影響があったとしている（注五）。では初刻本における胡承珙の影響にはどうであったか。その資料としては胡承珙が魏源に与えた書簡の中で『詩古微』の評価に触れているものがある。そこには二人の『詩』に対する態度の違いがうかがえる。胡承珙の魏源に与えた書簡は現在『求是堂文集』巻三に収められているが、その中で胡承珙は、魏源を毛奇齢・全祖望に劣らぬ人物とほめている。また彼は『詩古微』を評して、論じている三家詩と毛詩の異同については、多くの点で公平であり、「通人之論」に恥じないと言う。このように胡承珙の『詩古微』に対する評価は高かった。しかし彼は自分の『詩』解釈の態度として毛伝墨守をあげ、次のように述べる

承珙于『詩』、墨守『毛傳』、惟揆之經文實有難通者、乃舍之而求他證。（私の『詩』の解釈においては、毛伝を墨守し、ただ経文とつきあわせて本当に解釈が通じにくいときだけ、その解釈を捨てその他の例証を求めるのである。）

胡承珙の『詩』に対する立場は魏源とは異なる。魏源が三家詩と毛詩の解釈の総合を求めるのに対して、胡承珙は毛詩の墨守を基本的な態度としている。またこの後で胡承珙は『詩古微』が行った篇次と世系の改変について自分ならば行わないと書いている。そして『詩古微』への評価として胡承珙は次のように述べる。

僕讀足下之書、不欲爲異、亦不敢爲苟同。（私はあなたの著作を読んで、異論を唱えたいとは思いませんが、また軽々しく賛同したいとも思いません。）

ここからわかるように、胡承珙は自分と魏源の『詩』に対する態度に異なるものがあると考えていたようである。つまり胡承珙の『詩古微』に対する影響はあまり大きくないと考えられる。また胡承珙が道光六年

（一八二六）以来、三年間音信がなかったと述べていることから考えると、魏源が『詩古微』初刻を著すうえで胡承珙より直接指導を受ける機会は多くなかったのではないか。つまり手紙で触れているように、胡承珙の『詩』に対する見方・態度が、魏源に根本的な影響を与えたとは考えにくい。胡承珙の魏源への影響は『詩』を研究対象に選ぶ点ではあったかもしれないが、その内容について直接影響を与えたとは考えにくいのである。

一方『詩古微』における劉逢禄からの影響はどのようであっただろうか。まず初刻本については、劉逢禄が『詩古微』の序を書いている。その中で彼は魏源が西漢の今文博士の家法を信じ、『詩古微』を著したと言う。そしてその思想は劉逢禄自身の思想と規矩を同じくすると主張する。しかし前述したように初刻本において魏源はことさらに今文の家法を強調することはなかった。初刻本においては三家詩も毛詩も同様に重視しているのである。彼は諸々の注釈家の意見を「会通」させることを求め、特に三家詩のみを顕揚することはなかった。そればかりか彼は三家詩の片言を重視することには反対であった。そのため劉逢禄が述べるように初めから今文の家法を発揚させる目的で『詩古微』が書かれたとは考えにくい。このように初刻本では劉逢禄と魏源の主張には開きが存在すると考えられるのである。

それでは劉逢禄の『詩古微』二刻に与えた影響はどうであったか。二刻本では劉逢禄は『詩古微』に直接影響を与えている。劉逢禄は六経を貫く思想として『公羊伝』の三科九旨を提唱した。彼はその具体的な注釈書として『論語述何』・『尚書今古文集解』を著している。このように劉逢禄の経学思想は三科九旨を中心とするものであったが、『詩古微』二刻ではその思想は継承されている。例えば上に述べた『詩』の三頌が三科九旨の通三統説を明らかにするという考えは、既に劉逢禄の公羊思想に見られるものである。劉逢禄の『春秋公羊経何氏釈例』「通三統例」では次のように述べる。

『詩』之言三正者多矣、而尤莫著于三頌。夫子既降王爲風而次之邶鄘之後、言商周之既亡。終之以三頌、非新周故宋以魯頌當夏而爲新王之明徵乎。夫既以魯頌當新王而次之周後、復以商頌次魯而明繼夏者殷、非所謂三王之道若循環者乎。（『詩』において三正について述べるものは多いが、三頌ほどそのことを明らかにしているものはない。孔

子が周王の詩を降格して国風とし、邶鄘風の後に続けたのは、商と周が既に滅んだことを述べるものである。また『詩』を終わらせる際に三頌をもってしたのは、周を近い王朝とし、宋国の祖先である殷を遠い王朝とし、魯頌を夏に当てまた新王とする明らかな証しではないだろうか。そもそも魯頌を新王に当てて周の後に続け、また商頌を魯頌の次に置いて夏を継いだのが殷であることを明らかにしたのは、いわゆる三王の道は循環するようだということを示すものではないだろうか。）

この三頌のほかにも、「邶鄘衛答問」では『左氏伝』が劉歆によって削改されたことを述べている。これは劉逢禄によって提唱された考えであり、魏源が劉逢禄の経学思想を継承しているもう一つの証しである。三家詩重視の態度も劉逢禄の考えに沿ったものであると考えると、二刻本における二人の思想には密接な関係があったと言えるのである。

このように魏源が『公羊伝』を指導理論とし、西漢今文の家法を復活させようとしたのは、当時の社会を意識していると考えられる。この意識については既に高橋良政氏の論文に触れられているが、この意識は二刻本において初めて意識されるようになったものである（注六）。魏源は『詩古微』二刻において、夷狄の侵略による中国の弱体化という衰世観を提出した。例えば「邶鄘衛義例篇下」では「木瓜」は斉の桓公を讃える詩とするが、魏源は春秋の世は中国が夷狄に蹂躙されていたことを強調した。そして桓公の功績は夷狄を打ち払ったことにあるとする。そのため「木瓜」は桓公を讃えていると考えたのである。またその「木瓜」の解釈では、『公羊伝』の解釈する楚が夷狄より中国へと進む書法を用いて詩を説明している。そのことは魏源が『公羊伝』と自身の衰世観を結び付けていたことをうかがわせる。また彼は二南について殷商の末の文王の盛徳を表現したものとし、『詩』を衰世より太平に回復させる手段として捉えた。また彼は『詩』の諫書としての効用を強調している。これらのことは魏源が『詩』を社会問題に対する処方箋として捉えていた事を示し、彼の経書に対する要求がしだいに切実になっていったことを示す。その理由としては、二刻本の序が書かれた道光二十年（一八四〇）に勃発したアヘン戦争などの社会の動乱を考えることができる。道光年間の社会状況を『詩』の解釈に反映させていると考えられる。つまり当時の山積する社会問題が魏源の経学を現実と密接に関わらせていったと言えるのであ

る。

おわりに

以上『詩古微』の初刻本と二刻本の内容の異同について見てみた。二刻本が初刻本とは違う一番大きな特徴は、劉逢禄の影響が急速に強まっていったことである。魏源は二刻本において劉逢禄の学説を意識的に取り込んでいったが、それは初刻本には見られないものであった。では魏源自身が一体いつから劉逢禄の学説の継承発展を自覚したかと言えば、その時期は劉逢禄の死の前後ではないだろうか。「劉礼部遺書序」において彼が次のように述べているのが、その根拠と言えるだろう。

中華書局『魏源集』「劉礼部遺書序」

道光十年商横攝提格之歳、既論定武進禮部劉君遺書若干篇爲若干卷、羣經家法具在。諸子以源爲能喩其先人之志、復使敍其大都。（道光十年庚寅の歳、武進の劉先生の遺著何編かを何巻かに分けて『劉礼部遺書』とすることを議論し決定したが、先生の諸経に対する家法というものはその書の中にすべて備わっていた。皆は私を先生の志をよく理解していると考えて、また私にそのあらましを述べさせようとした。）

これよりわかることは、魏源が初刻本出版直後に既に劉逢禄の衣鉢を継ぐものと自覚しつつあったことである。ならば二刻本というのは、彼が劉逢禄の継承者としての自覚に基づいて『詩』を解釈し直したと言えるであろう。二刻本における劉逢禄の影響は後の魏源の経学の基調となり、咸豊五年（一八五二）の『書古微』もまたほぼ同じ態度で書かれている。そうだとするなら『詩古微』の版本の異同というのは魏源が自分の経学に対する姿勢を決めていく過程を示したものと考えることができるのである。本稿はその点に注目し論じてきたが、これだけでは彼の特徴を捉えたとは言えないかもしれない。魏源の経学の全体像や清代学術史における彼の位置づけなどは今後の課題として残されている。

（注一）梁啓超『清代学術概論』二十二

（注二）高橋良政「『詩古微』の成立とその版本」『中国古典研究三一』

高橋氏は、二の道光二十年序刻本について二十巻本を定本とすることを疑問視する。しかし「詩古微序」では魏源自身が二十巻本と言っていることや、黄麗鏞『魏源年譜』をはじめとする中国の学者が多く二十巻本をテキストとして使用することから、二十巻本を二刻本の定本として扱うことにする。

（注三）皮錫瑞『経学通論』（中華書局）「詩経」

論三家詩大同小異史記儒林伝可証

「三家大同小異、可以此詩推之。魏源不知此義、乃欲強合魯韓為一。」（三家詩の解釈が大同小異ということは、この詩〔黍離を指す〕より推察できるのである。魏源はこの道理がわからなかったので、そこで無理に魯詩と韓詩の解釈を一つのものであるとしようとしたのである。）〔〕内は引用者の注

（注四）夏伝才「論清代『詩経』研究的継承和革新」『天津師院学報一九八二―四』

（注五）李伯栄『魏源師友記』「胡承珙」（岳麓書社）

（注六）高橋氏　前掲論文